



2005 月 4 月発行

葬りの日のために

「イエスのためにそこで夕食が用意され、マルタは給仕をしていた。ラザロは、イエスと共に食事の席に着いた人々の中にいた。そのとき、マリアが純粋で非常に高価なナルドの香油を一リトラ持って来て、イエスの足に塗り、自分の髪でその足をぬぐった。家は香油の香りであいっばいになった。」(ヨハネによる福音書 12 章 2～3 節)

場所はベタニア、マルタ、マリア、ラザロたちの家で、催された食事会は、ラザロの復活を祝い、主イエスに感謝するために開かれた“感謝の集い”であったと思われます。ここでもやっぱりマルタは、かいがいしく立ち働き、給仕に余念がありません。

ラザロは、と言うと、既に主イエスと共に食事の席に着いているのですが、何も語らず、ただ沈黙を保ったままです。彼が沈黙を保つのは、此処だけではありません。彼は、生き返らされて、墓の中から出て来た後も、終始沈黙を保ったままです。その姿はこれ以後も変わりません。では、彼の存在感は薄いのか、と言うと、これほど重たい存在感もないのです。何せ彼は、死人の中から甦って、主イエス・キリストが「復活であり、命である」(ヨハネ 11:25) ことを、具体的に、此の世に証しする存在であったからです。彼は言わば、“沈黙の証人”なのです。何も、話すばかりがキリストの証人の務めではないのです。話さなくても、その存在そのものが、何よりの証だ、と言うような証の仕方もあるのです。否、そちらの方が、場合によっては、遥かに大きな証になるのです。何故なら、口による証の場合には、「口ばかり」、と言うことも起こりかねないからです。キリスト者は皆、キリストによって、既に死から命へと移された者です(同 5:24)。その点で、ラザロと同じです。黙っていても、存在そのものが、自ずとその事実を証言出来れば、私どもの伝道は、どんなにか力強いものとなることでしょう。

さて、次はマリアですが、ここで彼女は、途轍もないことをします。今日の貨幣価値に換算すれば、300万円にもなろうかと言う非常に高価なナルドの香油を、一度に主イエスの足に注ぎかけ、それを又、自分の髪の毛で拭ったのです。特別な客を迎えるとき、その頭に香油を注ぐと言う習慣は、古くからイスラエルにありました。しかし、どんな賓客に対しても、その足を洗うことは奴隷のする仕事でした。ですから、マリアが主イエスの足を拭いたと言うことは、主イエスの前に、自分を僕、はしためとして、額ずいたことを表わします。しかも、この時彼女は、自分の髪の毛で、香油で塗れた主イエスの足を拭いたのです。長い髪の毛は、女性の誉れ、栄光だと言われます(1コリント 11:15)。彼女は、自分を主イエスの僕とするばかりでなく、キリストの栄光の前に、自分の栄光をも完全に捨て去ったのです。それは、愛する兄弟ラザロを、生き返らせてくださった主イエスに対する、精一杯の感謝の表現であったのは勿論ですが、それだけではなく、いよいよこれから、主イエスが向かおうとされる、十字架の死が、外ならない自分たちの、否、この自分のためであることを、マリアは、その鋭い信仰の直観力をもって、的確に捉えていたからでした。私たちのために、栄光を捨て、僕となって、十字架に死んでくださる主イエスに対し、マリアも亦、自分の栄光を捨て、僕となって、主に応えようとしたのです。

この時、ナルドの香油が放つ、馥郁(ふくいく)とした香りは、家一杯に広がりました。そしてそれは、純粋なマリアの信仰が放つ、芳しい香り一つになって、いよいよその甘美さを増していったに違いありません。

パウロも、「神は、わたしたちをいつもキリストの勝利の行進に連ならせ、わたしたちを通じて至るところに、キリストを知るという知識の香りを漂わせてくださいます(Ⅱコリント 2:14)、と言いました。共々に、キリストを知る知識の芳しい香りが、満ち満ちる教会を目指したく思います。 牧師 三輪恭嗣

(2005 年 1 月 30 日の礼拝説教より)